



すみだの風景 墨田区内の河川 その4 大横川と橋の沿革

大横川は業平橋の北80mで源森川に連なり、南は堅川と交差し、さらに江東区内を流れ、横十間川と合流していました。しかし、現在、墨田区内の北十間川の合流地点から堅川までの区域は、大横川親水公園として整備されています。

さて、この川に架かる橋は、区内だけでも12に及びます。その一番北には業平橋がありますが、その名称の由来については、昌平坂学問所地理局によつて文化7年（1810）に起稿

され、天保元年（1830）に完成した「新編武蔵風土記稿」に、次のように書かれています。

「業平橋横川に架す、長七間幅二間の板橋なり寛文二年（1662）伊奈半十郎奉行して掛渡せり、業平天神の社辺なるを以て其名とす、」

業平天神は明治初めまで在原天神とも呼ばれ、在原業平の霊が祀られていましたが、今はありません。

業平橋から南へ、平川橋、横川橋、紅葉橋がありますが、いずれも大正末期から昭和にかけて架橋され、それぞれの橋の名は地名にちなんでいます。

紅葉橋は、昔このあたりに紅葉川という小さな流れがあつたことから、この名が付けられたのでしよう。

紅葉橋の南にあり、万治2年（1659）に架橋された法恩寺橋は、近くにある法恩寺にちなんだ名称です。この寺は太田道灌の供養墓があることで知られる古刹で、初めは江戸平河町（現 麴町）にあり、江戸の辰巳（南東）に位置するところから、鬼門除けとされてきました。本所に移ってきたのは元禄元年（1688）のことですから、

法恩寺橋も当初は別の名称がつけられたと考えられますが、定かではありません。

法恩寺橋の南にある清平橋は昭和4年の架橋で、清水町（現 亀沢四丁目的一部）と太平一丁

目とを結ぶところから、この橋名が生まれたようです。

清平橋の南に、寛政2年（1790）に架けられた長崎橋があります。この橋の西詰に長崎町（現 亀沢四丁目の一部）があり、東詰に津軽稲荷社・津軽侯の屋敷神が今も町の有志に護られて鎮座しています。なお、長崎橋は文久3年（1863）の絵図では、北中之橋となっています。

明治31年に京葉道路に架けられた江東橋は比較的新しい橋ですが、国道に架かる橋らしく、幅員は27mです。この橋の西詰は本所区入江町、東詰は柳原一丁目と呼ばれていました。橋の東にある都立両国高校は、戦前は東京府立第三中学校と呼ばれた名門校で、墨田区ゆかりの作家である芥川龍之介や堀辰雄も学んでいます。

江戸時代には、江東橋と撞木橋跡の中間の東岸、今の緑四丁目にある五柱稲荷あたりに、「時鐘屋敷」がありました。現在は跡形もありません。本所開拓の時、あるいは日光靈廟建築用木材調整作業が行われた時に、つぐら、働く人々に一定の時刻に鐘を鳴らして、時を知らせました。

江東橋の南にあり、万治2年（1659）に架けられた北横堀之橋と南横堀之橋は、後に北辻橋、南辻橋と、それぞれ橋の名を改めました。

堅川に架かる新辻橋と、大横

川に架かる北辻橋及び南辻橋とを合わせて、俗に撞木橋と呼ばれていた時代があります。これらの橋の位置関係が鉦をたたく撞木（十字形）の形に似ているからでしょう。なお現在は北辻橋が撞木橋跡と呼ばれています。大横川が江東区に入る手前に、菊柳橋と菊川橋があります。菊柳橋は昭和5年の架橋で、菊川三丁目（現 江東橋五丁目）と柳原町三丁目（現 江東橋五丁目）とを結んでいるので、このようなかしい橋名となったのでしよう。

区内で一番南にあり、元禄15年（1702）に本所奉行の鈴木平九郎と松平伝兵衛が架橋した菊川橋も、近くにあつた菊川の地名をとつて、名づけられました。初めは間之橋と呼ばれていましたが、享保5年（1720）に改架された際に、現在の名称となりました。

参考 「橋はかたる」
（墨田区教育委員会
昭和58年3月）

大横川親水公園

